

盲ろう者の生活困難と社会的支援に関する研究

眞鍋 寿理子

本研究の目的は、視覚と聴覚に障害のある盲ろう者とその家族へのインタビューを行い、さらに盲ろう者への専門的な支援施設であるA盲ろう者支援センター（以下、Aセンター）での取り組みから、盲ろう者とその家族の生活困難、Aセンターの意義と課題を明らかにする。その上で、盲ろう者の社会的支援のあり方を検討することである。

盲ろう者とは、視覚と聴覚に障害のある人のことである。しかし、「盲ろう」という障害の解釈や表現は日本の政府内でも異なる。また、視覚と聴覚それぞれの障害とは困難やニーズは異なる。しかし、「盲ろう」という障害について明確な定義に至っていない。

各章の概要は以下のとおりである。

はじめにでは、本研究の目的と背景、問題意識、本研究の構成を記している。

第1章では、日本における盲ろう者とはどのような人のことを指すのか、また盲ろうという障害についてどのように示されてきたのかを記述した。そのうえで、盲ろうの障害の困難とニーズは、視覚と聴覚それぞれの障害ではなく独自性があることを論述した。さらに、本研究における盲ろう者の定義を定めた。盲ろう者である福島智の『盲ろう者とノーマライゼーション癒やしと共生社会をもとめて』に記されている第二の壁である「コミュニケーション手段を用いて持続的に会話する相手を作ること」、第三の壁である「周囲のコミュニケーション状況に能動的に参加できるようにすること」に着目して展開する。

第3章では、調査方法と対象者の選定について説明し、さらに、Aセンターの概要を記した。さらに、盲ろう者とその家族へのインタビュー調査の結果から、生活での困難について考察した。調査方法は、Aセンターを利用している盲ろう者とその家族5組を対象にインタビュー調査を実施した（半構造化面接）。盲ろう者のインタビュー結果では、①親子関係、②学齢期の仲間、③就労、④Aセンター、盲ろう者の家族で

は、①親子関係、②子育て期、③子の就労、④Aセンターのそれぞれについて結果を記した。さらに、考察では、①親子関係、子育て期、②学齢期の仲間、③就労と子の就労、④Aセンターでのそれぞれの生活困難を個人または集団との関係性と、福島の言う第二の壁と第三の壁から検討した。

第4章では、第3章で考察した困難とニーズからAセンターと行政との連携や協働による社会的支援について考察し、Aセンターの意義について結論づけた。Aセンターの取り組みを通じて検討すべき盲ろう者に対する社会的支援は4点で記した。①盲ろう者と市民との交流および啓発、②親子など家族へのコミュニケーション支援、③開かれた人間的コミュニケーション空間の形成、④コミュニケーションスキルの向上と交通バリアフリーの推進であった。さらに、行政からのトップダウンによるシステムではなく、Aセンターのような盲ろう者の拠点、盲ろう者の生活実態や生活要求からのボトムアップによるシステムを構築する必要がある。

おわりにでは、今後の研究課題として、盲ろう者の多様な生活困難とその実態を継続して把握し、生活困難や実態の背景にある問題点をさらに深く掘り下げ、盲ろう者福祉の制度化、支援者の役割や課題についても具体的な検討を進めたい。